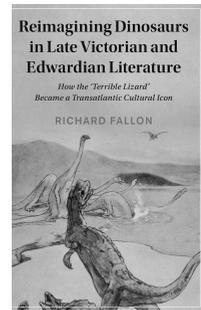


書 評

Richard Fallon, *Reimagining Dinosaurs in Late Victorian and Edwardian Literature: How the 'Terrible Lizard' Became a Transatlantic Cultural Icon*

(Cambridge: Cambridge University Press, 2021)

南谷 奉良 (京都大学)



本書の著者Richard Fallonは、現在バーミンガム大学に所属するレバークヒューム・トラスト若手研究員で、恐竜・古生物にまつわるフィクションや言説研究における新進気鋭の研究者である。2021年に刊行されたアンソロジー*Creatures of Another Age: Classic Visions of Prehistoric Monsters*の編者も務めている。*Reimagining Dinosaurs in Late Victorian and Edwardian Literature*は2010年代に相次いで刊行された地質学と古生物学およびポピュラーサイエンスに関する文化史的探求を行ったRalph O'Connor (2013)、Adelene Buckland (2013)、Gowan Dowson (2016)、Brian Noble (2016)、Will Tattersdill (2016)らの系譜に連なりながら、その研究の間隙と不足を埋める研究書である。著者は古生物学や地質学、人類学に関する著作を多く刊行した英国の著述家Henry Neville Hutchinson (1856-1927)を各章の中心的結節点に据えた上で、「恐竜」(terrible lizard/dinosaur)という曖昧な名称の意味的推移とともに、その絶滅動物に関する知の普及をマスメディアやジャーナリズム、フィクションの著述が大衆市場向けに提供しはじめた19世紀後半から20世紀初頭の英米間のトランスアトランティックな影響関係を論じ直し、高度に専門領域化されていく科学とそれとは区別されていくポピュラー・サイエンスの間の複雑な緊張関係が生み出した恐竜・古生物の姿を浮かび上がらせている。

第一章では、Hutchinsonの代表的著作*Extinct Monsters* (1892) (以下EMと省略する)を通して、「恐竜」の名称とイメージを人口に膾炙させた市場的・教育的功績とそれゆえに向けられた批判が論じられる。Hutchinson

は *Nature* 誌を代表とするジャーゴンに満ちた科学的記述に批判的であり、社会に教育的な知を伝播させる上で、「アクセスしやすい文学的なスタイル」(26頁)を重要視していた。文学と科学を接合させる彼の態度は、未だ文学的風土と協和していた19世紀前半の地質学の筆致を受け継ぐばかりか、元ライエルの秘書にして、19世紀後期で最も成功したポピュラーサイエンス作家 Arabella Buckley (1840-1929) のフェミニンな影響を受けると同時に、Robert Louis Stevenson や H. Rider Haggard、H.G. Wells に代表される「ファンタジー要素のある出来事に入念に作り込まれたリアリズムの風味」を組み合わせる1880年代以降のマスキュリンな「ニューロマンス」の文学的気風とも共鳴していた(38-40頁)。時代の市場的欲望を的確に掴んだ *EM* は1890年代には第5版を重ねるまでの売れ行きを見せたが、一方で、Hutchinson が「専門家」としての権威性を帯びた声で古生物学者の意見に挑戦し、物語やロマンス、驚異性を記述に織り込んだことで、自分たちの領域を脅かされたと感じる科学者から手厳しい批判を突き返される。特に Harry Grovier Seeley (1839-1909) は、地質学協会員ではあったものの直接研究成果をあげたわけでもない Hutchinson を疑わしい資質の書き手とみなし、その著作の社会的影響力に警戒を示し、*EM* に次ぐ著作 *Creatures of Other Days* (1894) を「科学というよりは文学作品」(44頁)と断じて、科学的専門家のコミュニティと Hutchinson の読者層の間に截然たる一線を引こうとした(注1)。同様に、神学的目的論と古生物学のロマンスが強調され、神話やおとぎ話さえもが科学的根拠に使われた *Prehistoric Man and Beast* (1896) にも厳しい批判が向けられた。Fallon は、「科学と文学は、〈知〉の同じ連続体にある」(61頁)という Hutchinson の信念を描きながら、そのポピュラーサイエンティストとしてのステータスが、分化していく領野の狭間に痛ましく落ちこんでいく様子を綿密に論証している。

第二章では、O'Connor が19世紀前半を対象に分析していた恐竜を描き出す言語を20世紀転換期に敷衍し、その語彙形成に寄与した作品として、広範な人気を博した Louis Carrol の *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) と *Through the Looking-Glass* (1872) の影響を指摘している。「恐竜」という言葉が未だ定着していない世紀末において、アリス物語のグリフォンやモックタートル、特にジャバーウォックがもつ「どこか滑稽な怪物的な姿」は

—John Tennielによる挿絵とともに—恐竜を想像的に復元するための視覚的な参照枠とアナロジーを、ポピュラーサイエンスの著述家のみならず、Othniel C. Marsh (1831-1899) のような専門古生物学者にも提供した。とりわけ進化論言説下において形態上「ナンセンス」に見える怪物的な恐竜は“unwieldy”、“ungainly”、“grotesque”といった形容詞とともに描き出され、生存と進化に失敗した生物として表象された。Carrolの怪物を比喩に用いる著述家たちは、その不恰好で図体の大きい身体をもつ恐竜を「進化上の不適合をあらゆるグロテスクな典型」と捉える点で一致しており(72頁)、当時唱えられた定向進化説や種族的衰退の言説とともに、その種の絶滅の主因としていた。かくして恐竜を恐竜たらしめている異例な特質そのものがその絶滅を導いたという結論が導かれ(74-75頁)、それまでの伝統的な恐竜の形容辞であった崇高さ、ロマンス、ミステリアスな性質は嫌悪感を示す語で置き換えられていった(79-81頁)。Fallonは特に巨大なフリルと頭骨を特徴とするトリケラトプスがグロテスクな生物として表象された例を詳述しているが、そのような造形の時代的特殊性は、映画『ジュラシック・ワールド』シリーズ内で、その動物の幼体の子供が乗ることができるほどにまで馴致された愛玩・荷役動物になっている扱いと比較したときにも、より一層際立つだろう。Fallonはこの他にも、アリス物語と(Hutchinsonの意に反して)EM及びJoseph Smitの挿絵を利用したアメリカのユーモア作家Eugene Field (1850-1895)の詩作品や1890年代に風刺画シリーズを発表していたTennyson Reed (1860-1933)、CarrolとHutchinsonの著作のタイトルやモチーフを組み合わせたようなEdward W. D. Cumming (1862-1941)の*Wonders in Monsterland* (1901)とEmily Octavia Bray (1847-1926)の小説*Old Times and the Boy; or Prehistoric Wonderland* (1921)といった埋もれた文学を発掘することで、本章の論点を説得的に裏づけている。

第三章の前半部では、膨張主義のフロンティアが国家や地球から他の惑星へと拡張されるアメリカ人作家による二つの物語——John Jacob Astor (1864-1912)の*A Journey in Other World: A Romance of the Future* (1894)と、Gustave W. Pope (1828-1902)の*Journey to Venus* (1895)——が論じられる。後半部では、1899年に出版されイギリス人作家による三つの物語——Henry Augustus Hering (1864-1945)の短編“Silas P. Cornu’s Divining-Rod”、

C. J. Cutcliffe Hyne (1866-1944) の長編 *The Lost Continent*、Frank Savile (1865-1950) の *Beyond the Great South Wall*——が論じられる。Fallon は、これらの作品に登場する恐竜・古生物の表象の分析を通して、ヴィクトリア朝の「恐ろしいトカゲ」が摩天楼に象徴されるアメリカのモダニティを象徴する巨大恐竜になった移行は、大英帝国からアメリカへ資本主義的帝国主義のバトンが渡された移行と同期するといった説明 (W. J. T. Mitchel) や、アメリカの 18-19 世紀における国家的シンボルであったマストドンが 20 世紀には恐竜へ移行した (Paul Semonin) といった雑駁なナラティブに批判的に切り込み、すでに 1890 年代の時点で英米の作家たちが「アメリカで発掘された恐竜」を用いてそれぞれの帝国主義的な国家的アイデンティティを表象するシンボルにしていたことを論証している。男らしさの証明である恐竜狩りとその馴致、退化論言説と進歩主義史観、マニフェスト・デスティニーを宇宙空間にまで広げる植民地主義幻想、恐竜・古生物とある民族の淘汰・絶滅の重ね合わせ等々、世紀末に広がっていた「支配のパラダイム」(106 頁) を観察する手腕も見事だが、とりわけ 1898 年の *New York Journal and Adviser* 紙で報道されたワイオミング州での “*Brontosaurus Giganteus*” の化石発掘を取り上げ、当時のイエロー・ジャーナリズムによる扇動的な書き方と誤情報を通じて、多様な姿の「プロントサウルス」が大西洋を越えて移動し、ジャーナリズムとポピュラーサイエンス、文学テキストのなかをインターテクスチュアルに往還する経路を描いた分析は卓抜である。

第四章では、現代にまでその影響を持続させている Arthur Conan Doyle の *The Lost World* (1912; 以下 *LW* と省略する) をはじめとするチャレンジャー教授ものが主に扱われる。Fallon は *LW* の草稿や書簡、英米の出版社で出された複数の版に掲載された挿絵の相違を検討することで、Doyle が知人や親類の助力を得ながらテキストを緻密に制作していった過程を詳細に論じている。そして Doyle 自身のスピリチュアリズムへの傾倒や化石収集熱、彼が 1909 年にエーゲ海で水棲生物を目撃したという証言および未確認動物学への関心を折り込みながら、この作家の即物的で幻想の入り込む余地のない科学的知識に対する敵意と、ロマンスの優位性を追求し、未知なるものを願望する態度を明らかにしている。Doyle は物語に「本物らしさ」を賦与すべく、テキストに入れる挿絵や合成写真を入念に準備し

たが、Fallonは、LWで疑似ルポルタージュやフォトリアリズムの仕掛けが組み入れられた動機に対して、「ニューロマンスの形式の擬似的な本物らしさが、科学とロマンス、フィクションと現実が折り重なる場所を探求するための文学的空間をドイルに提供した」背景を挙げている(138頁)。その実践の一つが、DoyleがE. Ray Lankester (1847-1929)の*Extinct Animals* (1905)に掲載されたステゴサウルスの挿絵を義理の弟Patrick Lewis Forbesに示し、いくらかの差異や背景を付して完成させられた挿絵である(物語上ではステゴサウルスを目撃したMapel Whiteが描いたとされる)。Doyleはこの演出をさらに進め、Lankesterとその書物の名前を実際にLWに登場させることで、現実とフィクションが会おう余白を、「絶滅動物がまだ生存しているかもしれない」というあわいの可能性を読者の心のなかに作り出そうとした。実際、当時の社会には恐竜・古生物の生き残り説に対する信憑性が多分にあった時代であり、彼の化石収集熱や目撃談もそうした雰囲気の中の産物であった(152-57頁)。また、Fallonが的確に論証しているように、Doyleは出版社の判断で掲載したHarry Rountree (1878-1950)の挿絵に異を唱え、Forbesによる恐竜や古生物が生息している情景描写に若干のヴェールがかかった絵を好んだ。それはドイルが「知の追求と無知ゆえの喜びが均衡する絶妙なバランス」(150頁)を望み、また「記憶や想像、そして疑いもが、同時に心地よく働く余地を残す」(167頁)ことを好んだ性向に由来している。ジャーゴンに満ちた専門科学に対するDoyleの反感、その反知性主義や反物質主義は、(第一章で説明されていた)Hutchinsonら世紀転換期のポピュラーサイエンスによって共有されていた特徴的な心性であった。このようにLWを扱う最終章において、本書の中心的ノードであるポピュラーサイエンティストに繋げ返すことで、議論の統一的構成を高めている点も見事である。

本書末尾でも述べられているように、約30年間をかけて完結した『ジュラシックパーク』(1993)から『ジュラシック・ワールド／新たなる支配者』(2022)における一連の映画シリーズは恐竜という絶滅動物を一躍ポピュラーにした一方で、21世紀以降の中国における化石発掘の成果や2017年にMatthew・G・Barronらが発表した新しい進化系統樹説等、最新の古生物学発見にはほとんど影響されない形で恐竜を造形しているために、専門

科学の認識と大衆消費において著しいギャップを生んでいる(181-82頁)。この新しい溝と分断は、20世紀転換期の専門科学とポピュラーサイエンスの関係を反復しているようでもある。Fallonの功績は、そうした緊張関係のなかでこそ光が当たる恐竜・古生物文学作品を発掘し、単一の国家内や自然科学の面からだけでは見えてこない文化的意義を示した点にある。拙論(南谷, 2020)でも示したように、この広大にして深遠なフィールドには十分な批評的精察を受けていない恐竜・古生物をめぐる文学的化石がまだ数多く眠っており、本書にはそれらの将来的な分析の可能性についても言及されている(178頁)。Doyleが求めたような“the appealing mystique of the unknown”(152頁)と“the deeper romance of the not yet known”(160頁)の興奮を読者にも共有させる本書からは、今後この領野を牽引するだろう著者のさらなる活躍が期待される。

注1

但し、Seeleyの批判はポピュラーサイエンスに対する警戒感からだけでなく、古生物学者内部の分類法をめぐる対立に由来する緊張関係から生まれていた。HutchinsonはThomas Huxleyによる鳥類との類縁関係を示すオルニトスケリダの分類に依拠したMarshの記述をもとにしながら、Seeleyが骨盤の形状をもとに提唱した(後年通説となる)鳥盤類と竜盤類の分類を意図的に無視していた(48-49頁)。

Buckland, Adelene. *Novel Science: Fiction and the Invention of Nineteenth-Century Geology*. U of Chicago P, 2013.

Dawson, Gowan. *Show Me the Bone: Reconstructing Prehistoric Monsters in Nineteenth-century Britain and America*, Cambridge UP, 2016,

Fallon, Richard. *Creatures of Another Age: Classic Visions of Prehistoric Monster*. Valancourt Books, 2021.

Noble, Brian. *Articulating Dinosaurs: A Political Anthropology*. U of Toronto P, 2016.

O'Connor, Ralph. *The Earth on Show: Fossils and Poetics of Popular Science, 1802-1856*, U of Chicago P, 2013.

Tattersdill, Will. *Science, Fiction, and the Fin de Siècle Periodical Press*, Cambridge UP, 2016,

南谷奉良「洞窟のなかの幻想の怪物——初期恐竜・古生物文学の形式と諸特徴」,
『幻想と怪奇の英文学 IV——変幻自在編』東雅夫・下楠昌哉編, 春風社,
2020年, pp. 31-53.